



Column

早期教育と研究

藤 栄 剛

私はクラシック音楽が好きなので、その類の音楽を聴いたり、時折、テレビで演奏を鑑賞したりする。スピーカーや画面のむこうのプレーヤーは、人間業とは思えないテクニックと多彩な表現力をもって、時には胸を打つような演奏を聴かせてくれる。

バイオリンやピアノといった楽器は英才教育、早期教育の象徴のようにみなされている。二十歳を過ぎて、バイオリンを手に取った人がある日どういう心変わりか、プロを志して猛練習を始めたところで、失笑を買うか新手の冗談としかとられないだろう。まず誰も本気とは受け取ってくれない。なぜか。それは手遅れだからだ。早期教育が必要とされる楽器はみな、極めて繊細な聴覚、音に対する感受性を体得していること、そして、幼少からの毎日の技術的トレーニングを必須とする。早期教育が必要とされるのは、こうした能力が幼少の頃にしか習得できず、しかも絶え間なき鍛錬によってしか養われないからだ。いくら優れた知覚・能力・知識・才能を有していようと、そのタイミングを見失えば、ダイヤモンドはただの石ころになる。胸を打つ演奏ができるか否かは初期（＝幼少時）の状態に大きく依存していると言ってもおかしくないだろう。特定の年齢でしか養えない能力が厳然と存在し、いったんその時期を見逃せば、どうあがいても取り返せないのである。

その一方で、音楽・楽器に関する知識の蓄積にそのようなタイミングはない（厳密にはあるかもしれないが）。だから、耳を肥やして、プレーヤーの演奏に蘊蓄を傾けたり、評論や感想を述べることもできるし、ある作曲家の作風や曲の背景など、いくらでも知識を身につけることはできる。しかし、どんなに知識

を得たところで、感動を与える音を創り出せるようになれるわけではない。どんなに切望しても、である。

ところで、私が最近読んだ本の中で、技能は二つのタイプに分類されていた（青木・奥野編著『経済システムの比較制度分析』東大出版会、1996）。一つは機能的技能、もう一つは文脈的技能と呼ばれる技能である。機能的技能とは専門的に特化され特定の場を越えた価値を持つ技能をさし、文脈的技能とは一般的な情報処理能力を意味し、ある文脈の中で有用な特殊的技能をさす。この分類から、演奏技術は機能的技能、演奏を取り巻く知識は音楽という文脈の中で有用であるという意味で、文脈的技能と類推することができる。

音楽の世界から研究の世界に目を転ずると、研究は一般的な情報処理能力を駆使する行為というよりはむしろ、専門的に特化され特定の場を越えて流通可能な情報を生産する行為ととらえる方が近い。つまり、さきの分類に従えば、研究は機能的技能ということになるだろう。であれば、研究にも上記の音楽の話当てはめられるのではないか。

一見すると、社会科学の研究では情報量の多寡が物を言うかのように思われることが多い。たしかに、政府の資料、統計など様々な社会情報はあつては越したことはない。しかし、音楽の世界がそうであるように、最も重要なのは幼少の頃にしか身に付けられない早期教育で培われる部分である。この部分が養われていなければ、趣くままに蘊蓄を述べたり、批評をする素人の音楽好事家と何ら変わりない。つまり、機能的技能である研究を行うには、研ぎ澄まされた感覚とよくトレーニングの積まれた技術が最も重要であるということになるだろう。そして、基礎トレーニングを20年以上積んだソリストがようやく開花するのと同じように、研究にもその程度の不断の積み重ねがあつてこそ、その演奏（＝研究）は輝きを帯びる。社会科学研究が年輪とともに深まるといわれるゆえんはこの点にあるのであつて、様々な情報を知っているそのこと自体はあまり意味を持たない。

少し乱暴な議論になってしまったかもしれないが、それでもこの点はとても重要であるように思う。